

# ハリー・ポッターは男らしいのか 一経年変化による男ことば・女ことばの使用の変化

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00050895">https://doi.org/10.24517/00050895</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## ハリー・ポッターは男らしいのか

### —経年変化による男ことば・女ことばの使用の変化—

経済学類4年 深谷美都季<sup>1</sup>

#### <概要>

日本語には語尾を「だぞ」「だわ」にすることで、男性もしくは女性が使用していると客観的に判断できる習慣があり、そういった言葉を男ことば・女ことばと言う。そのような性差的な表現は、世代によって使用頻度に違いがあるようだ。本研究では、映画の吹き替え版を使用して登場人物が性差的な表現をどのような場面で、どのくらいの頻度で使用しているのか、成長するにつれて使用頻度がどのように変化していくのかを明らかにする。仮説として、子供の頃は他者への意識が希薄な時期であることから乱暴な表現を使用しやすく、成長するにつれて常識や世間体を気にするようになり、中性的な表現を多用し性差的な表現を控えるようになると考えた。この仮説を検証するために、映画『ハリー・ポッター』シリーズの中から成長の変化がわかりやすい3作を使用する。ハリー・ポッターとハーマイオニー・グレンジャーの台詞から性差的な表現の使用頻度を調査し、経年変化による変化があるかどうかを分析した。

#### <キーワード>

男ことば、女ことば、経年変化

---

<sup>1</sup> mf-sh.326@ezweb.ne.jp

## <目次>

1. はじめに
  - 1.1. 背景・目的
  - 1.2. 先行研究
  - 1.3. 問題提起
2. 方法
  - 2.1. 対象
  - 2.2. 方法
3. 結果
  - 3.1. 文末表現
    - 3.1.1. ハリー・ポッター
    - 3.1.2. ハーマイオニー・グレンジャー
  - 3.2. 文頭表現
  - 3.3. 代名詞
  - 3.4. 性差的表現での比較
    - 3.4.1. 判定詞「だ」
    - 3.4.2. のか・のだの疑問文
    - 3.4.3. 普通体+よ
    - 3.4.4. 命令形・禁止形・依頼表現
    - 3.4.5. 疑問文
    - 3.4.6. 終助詞
4. 考察
5. おわりに

## 参考文献

## 1. はじめに

### 1.1. 背景・目的

日本語は性差が目立つ言語で、そのような言語は世界でも数少ない。日本では男性的特徴がある言葉を男ことば、女性的特徴がある言葉を女ことば、と言う。なぜ日本人は男ことば、女ことば、というものを使用して性差が出る表現をするのだろうか。そもそも、学校教育において男ことばはこの表現、女ことばはこの表現、というような教育を一切受けてこなかったのになぜ性差が現れている、と日本人は感じるのか。また性差が現れる表現をするのか。これらの疑問から、男ことばや女ことばは経年変化によって使用頻度にどのような変化が現れるのかということに興味を持った。

そこで、本研究では、映画の吹き替えを使って登場人物が男ことばや女ことばをどれほど使用しているかを調査する。具体的には、映画の中で登場人物が年齢を重ねるごとに男ことば・女ことばの使用頻度をどのように変化させるのかを明らかにする。

### 1.2. 先行研究

男ことば・女ことばに関する先行研究として小川(2006)、女性の文末表現の先行研究として増田(2016)を取り上げる。

まず、男ことば・女ことばに関する先行研究が数多くある中でなぜ小川(2006)を取り上げたかという点、性差を表す様々な要素がある中で、最も性差を表しやすい終助詞に注目している点と、筆者が性差のある終助詞としたものを小川(2006)も同様に使用している点が今回の研究に近いと考えたからである。また、増田(2016)に関しては、女性の文末表現に限定された論文であるが、時代変遷による女性の文末形式の調査を行っており、現在の文末表現の使用割合を見ることができると考えたからである。

小川(2006)は、男女による話しことばの終助詞の使用差に特化して調査している。その結果、女性語・男性語として知られている終助詞が実生活で使用されている割合は極めて低いことが明らかとなった。そのため、性差の現れる終助詞が使用されなくなってきていることから、現代の社会的傾向が文末表現にも影響していると指摘している。

増田(2016)は、尾崎(2011[1997])が分析した女性文末形式に経年変化があるのか調査している。終助詞「わ」の使用と助動詞「だ」の不使用、助動詞「だ」+終助詞「わ」の使用について分析している。女性語の「わ」は、どの世代においても使用が衰退している。「だ」の不使用は、特に30代以下の衰退の顕著化と40代も使用の低下がみられる。「だわ」の使用は死語に近い状態の使用頻度の低さを指摘している。増田(2016)から、20年経った現在でも女性文末形式は使用されているが、全体的な減少傾向が明らかにされている。

### 1.3. 問題提起

子供は一般常識という概念があまり学習されていない時期であることから、子供の言葉づかいは周りの環境に影響されている。そのため、最も間近である親の会話に影響されやすいと考える。例えば、亭主閑白な父親がいる家庭であれば、父親は男らしい威厳のある男ことばを母親に対して使用することが多く、母親は父親に対して下手に出ることが多いことから、断言的な表現を使用しない女性的な表現を使用することが増えるのではないだろうか。その会話を聞いて育った子供は、そのような言葉づかいが当たり前だと思って日常会話で使用する。そのため、自然と子供

は性差的な表現を使用することが多くなると考えられる。子どもは学校などで友達や先生と会話することで、状況に合った言葉づかいを学んで使用するようになるのではないだろうか。そのため、子供が小さければ小さいほど周りからの影響が少ないため、性差の出る言葉を使用する傾向があると考えられる。例として、『クレヨンしんちゃん』という日本アニメでは、主人公の野原しんのすけは幼稚園生ながら、「おら野原しんのすけだぞ」「やれやれだぞ」というような、男ことばを多用している。また、野原しんのすけは破廉恥な言葉をよく発するが、まだ幼いからなのかそのような言葉を発してもあまり大人から注意されていない。このような傾向から、小さい子供は乱暴な言葉を使用しやすく、そのような表現方法を使用しても世間から許されるのではないかと考えた。同様に、女ことばも年齢が低いほど女性らしい言葉を使用するのではないだろうか。また、先行研究の小川(2006)と増田(2016)は、現代の人々は性差の出る表現を使用しなくなっている」と述べている。これらから、幼少期に許されていた性差のある表現は、年を重ねていくほど世間から厳しい目を向けられるようになり、成人になると性差が現れやすい男ことば・女ことばの使用頻度は減少していく、という仮説を立てる。

## 2. 方法

### 2.1. 対象

調査資料として映画『ハリー・ポッター』シリーズの全7作を初期、中期、後期に分け、各時期かく1編ずつのうち3作を使用する。なぜ『ハリー・ポッター』シリーズを調査資料に使用するかは後述する。第一話の『ハリー・ポッターと賢者の石』、第三話の『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』、最終話の『ハリー・ポッターと死の秘宝 part1』『ハリー・ポッターと死の秘宝 part2』の4作である。『ハリー・ポッター』シリーズは、全て原作はイギリスの児童文学作家J.K.ローリングで、ハリー・ポッター役にダニエル・ラドクリフ、ハーマイオニー・グレンジャー役にエマ・ワトソン、ロン・ウィーズリー役にルパート・グリン트가演じた人気映画である。『ハリー・ポッター』シリーズの吹き替え翻訳は全て岸田恵子が行っている。

『ハリー・ポッターと賢者の石』はクリス・コロンバス監督の作品である。この映画では、主人公ハリーとハーマイオニーが10歳、11歳の時期の物語である。幼い頃に両親を亡くし、叔母のところに預けられていたハリーは、魔法学校からの入学許可の手紙が来てからハリー自身が魔法使いであることや自分の過去、家族について知っていく。叔母や叔父の反対を押し切って魔法学校に入学し、そこでかけがえのない友人となる同い年のロン・ウィーズリーとハーマイオニー・グレンジャーに出会う。また、ハリーの心強い味方となる教師との出会いも経験し、魔法学校で充実した生活を送る。ある日、魔法学校に隠された賢者の石の秘密を知り、また闇の力がまた復活しようとしている事実を知ったハリー達三人組が結束して賢者の石の解き明かし、闇の力と勇敢に戦うストーリーである。

『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』はアルフォンソ・キュアロン監督の作品である。ハリーとハーマイオニーは13歳である。アズカバンという監獄から凶悪犯のシリウス・ブラックが脱獄したことから話が始まる。ヴォルデモートの家臣で、ハリーの両親と友達のピーター・ペティグリューを殺害したシリウスが脱獄したことで、ハリーの身に危険が迫っていた。そのためディメンターというアズカバンの看守が魔法学校を見張るようになるが、ハリーは闇の魔法使いヴォルデモートから家族を奪われた強い悲しい過去を持つため、ディメンターに大きく影響を受けてしまう。そのため、ディメンター対策の呪文を闇の魔術に対する防衛術の担当で新しく来た

ルーピン先生に教わりながら関係が親しくなっていく。ハリーはロンの双子の兄たちから忍びの地図を貰い、死んだはずのピーターが存在することに疑問に思う。その後ハリー達はシリウスと出会い、シリウスとルーピン先生が共犯であることと、シリウスが本当は無実の罪だったことを知る。そして、ロンのペットであるネズミがピーターであることが判明し、ピーターを捕えてアズカバンに送り込もうとするが逃げられ、シリウスは捕まってしまう。その事実を変えるためにハリーとハーマイオニー二人がタイムスリップして事実を変えるストーリーである。

『ハリー・ポッターと死の秘宝』はデヴィッド・イェーツ監督である。ハリー・ハーマイオニーは16、17歳である。正義の中心にいた魔法学校の校長が殺されてヴォルデモートの悪の勢力が強くなった状況からスタートする。悪の勢力から逃れながらヴォルデモートを倒すための分霊箱を探す。悪の支配下のなった魔法省に忍び込み分霊箱を手に入れるが破壊方法がわからず、ハリー達は答えを探しながら冒険を続け、分霊箱の悪影響を受けながらもヴォルデモートを倒すために冒険を続けていく。そして破壊方法や他の分霊箱を見つけ出す。その頃、ヴォルデモートら悪の魔法使いたちは、最後の砦である魔法学校を破壊しようとし、ハリー達と直接対決をする。そして、最終的にハリーがヴォルデモートを倒して悪に打ち勝つストーリーで終わる。

## 2.2. 方法

すでに述べたように、男ことば・女ことばの経年変化による比較の調査をする一例として、今回『ハリー・ポッター』シリーズを使用する。『ハリー・ポッター』シリーズは、映画ごとに年齢が異なるため、経年変化における言葉の変化を比較しやすいと仮定した。調査方法として、映画のセリフを全て文字起こしし、主人公のハリー・ポッターとハリー・ポッターの女友達であるハーマイオニー・グレンジャーの二人の台詞を対象として変化を調べた。

また、ハリーとハーマイオニーの調査する台詞に関して、いくつか条件を付けた。

1つ目として、学生同士での会話に限定する。先生など年上の人が交えた会話になると敬語を使うため、正しい分析ができないと判断したからである。

2つ目として、会話を調査対象としたため、自分自身に向けた「どうしよう。大丈夫。リラックス。」といったような独り言や、「わー！」や「きゃー！」といったような悲鳴は対象外とする。

3つ目として、名前だけを呼んで終わる台詞や最後まで言い切っていない台詞は対象外とする。名前だけを発して台詞が終わる場合や、途中で他の人が遮ることで台詞が途中で終わる場合は調査対象にしない。

4つ目として、『アズカバンの囚人』の話で、時間を戻して一度見たシーンをもう一度再現している場面がある。そのような同場面による2度目の同台詞については対象外とする。

これらの条件をもとに調査対象となった台詞は『賢者の石』で326文、『アズカバンの囚人』で292文、『死の秘宝』で497文、合計1115文である。

また、男ことば、女ことばの分類方法として、益岡・田窪(1992)、金水(2003)をベースに『賢者の石』『アズカバンの囚人』『死の秘宝』のハリー、ハーマイオニーの台詞を分類する。単語の品詞を調査する際には『明鏡国語辞典第二版 大型版』(2011)を使用する。

ハリーの台詞の男ことばとして、判定詞「だ」、疑問文の「のか・のだ」、「普通体+よ」、命令形・禁止形・依頼形、疑問文、終助詞、代名詞「僕」「君」、感動詞「おい」「こら」での分別を行った。益岡・田窪(1992)によれば「名詞と結合して述語を作るのが判定詞である。文中での働きの違いに応じて活用する。」とされている(p.25)。そのため、金水(2003)のように判定詞「だ」

の活用形として、だ・だよ・だね・だよねの文末表現のものを判定詞「だ」の男ことばとする。疑問文の「のか・のだ」については、「いいニュースでも聞けるっていうのか？」といった形で疑問文の文末に、「のか・のだ・んだ」が来る場合を疑問文の「のか・のだ」の男ことばとする。「普通体+よ」の普通体とは、丁寧体ではない文体のことである。丁寧さがない文の文末に「よ」をつけることで、「法廷に降りて行ったよ」というような男ことばに変化する。命令形・禁止形・依頼形については、動詞の命令形での命令形や禁止形、命令形に近い依頼表現である「買ってきてもらえないか」「買ってきてくれ」というような表現を男ことばとする。疑問文については、「普通体+か、かい」の表現を使用する場合の「忘れちゃいけないか」というような表現を男ことばとする。終助詞については、「ぞ・ぜ・か」といった強い主張を表す終助詞を男ことばとする。代名詞については、「僕」と「君」を使用した文章を、男ことばを扱う文と判断する。最後に文頭表現として、感動詞の「おい」「こら」を男ことばとする。

ハーマイオニーのセリフの女ことばとして、判定詞「だ」、疑問文の「のか・のだ」、命令形・禁止形・依頼形、疑問文、終助詞、平叙文+α、代名詞「あたし」、感動詞「あら」「まあ」での分別を行った。判定詞「だ」については、判定詞の「だ」を抜きとって「よ・ね・よね」を付け加えた状態の文を女ことばとする。疑問文の「のか・のだ」については、「のか・のだ」それぞれの「か・だ」を抜き取った状態を女ことばの疑問文とする。命令形・禁止形・依頼形については、動詞の命令形のようなきつい表現は女性的ではないことから、「～して下さる？」というような敬語を共に使用することで女ことばとなる。疑問文については、「～して下さらない？」という表現を文末に使用することで女ことばとなる。終助詞については、「わ」を「ちゃんと聞いたわ」といったように文末につけることで女ことばとなる。平叙文+αについて、そもそも『広辞苑 第六版』(2008)から、平叙文とは「物事を主観をまじえず、ありのままに述べる文。疑問文・命令文・感動文などに対していう」とされている(p. 2520)。+αに入る女性的な表現としては、「の・かしら・ですもの」が入る。代名詞については「あたし」を使用した文章を、女ことばを扱う文と判断する。最後に文頭表現として、感動詞の「あら」「まあ」を女ことばとする。

### 3. 結果

#### 3.1. 文末表現

まず文末表現のみに注目する。それぞれの映画におけるハリーとハーマイオニーの台詞の男ことば・女ことばの割合は以下ようになった。

##### 3.1.1. ハリー・ポッター

ハリーについて『賢者の石』『アズカバンの囚人』『死の秘宝』(図1,2,3)全てに当てはまることは、圧倒的に中性的表現が多いことである。特に『死の秘宝』(図3)については全体の72%が中性的表現となっている。『賢者の石』(図1)では57%、『アズカバンの囚人』(図2)では64%で、それぞれ中性的表現を半数以上使用していることがわかる。それぞれの話における男ことばの使用割合で次に多いのは、判定詞「だ」を使用した男ことばである。『賢者の石』(図1)では全体の21%、『アズカバンの囚人』『死の秘宝』(図2,3)では全体の17%となった。判定詞「だ」の種類として、「だ・だよ・だね・だよね・んだ・んだよ・んだね」があるが、「んだ」での使用が最も多くみられた。「んだ」の「ん」については、元々は「のだ」であり、「のだ」の「の」については、準体助詞という名詞の扱いをすることができるので、「のだ」を判定詞「だ」の分類に含めている。

また、男ことばの使用頻度の高いものから三つ順に並べると、『賢者の石』(図1)では判定詞「だ」・「普通体+よ」、命令形・禁止形・依頼表現、『アズカバンの囚人』(図2)では、判定詞「だ」、「普通体+よ」、終助詞、『死の秘宝』(図3)では、判定詞「だ」、「普通体+よ」、のか・のだの疑問文と命令形・禁止形・依頼表現、という順になった。これらの順位付けにより、全ての映画において判定詞「だ」と「普通体+よ」の使用頻度が多いことがわかった。また、3作全てに女性的表現の使用が見られた。

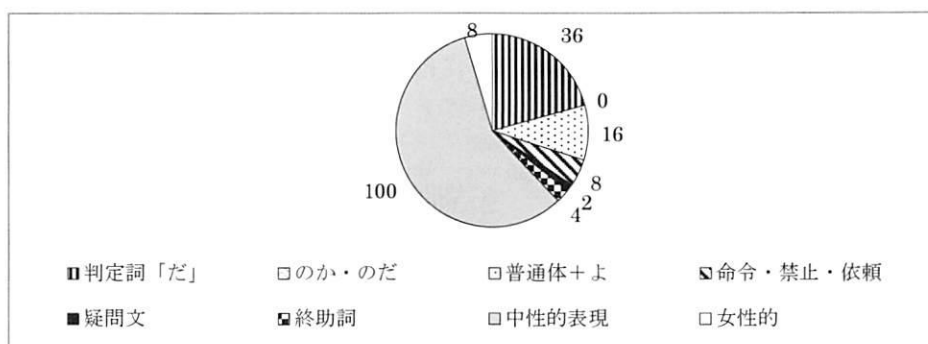


図1：『賢者の石』でハリーの使用した文末表現

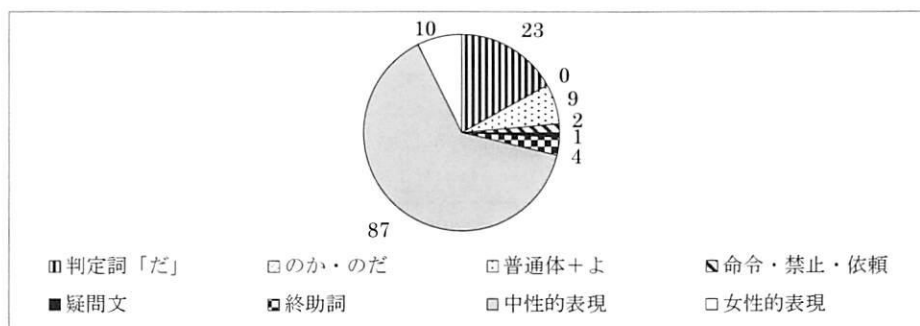


図2：『アズカバンの囚人』でハリーが使用した文末表現

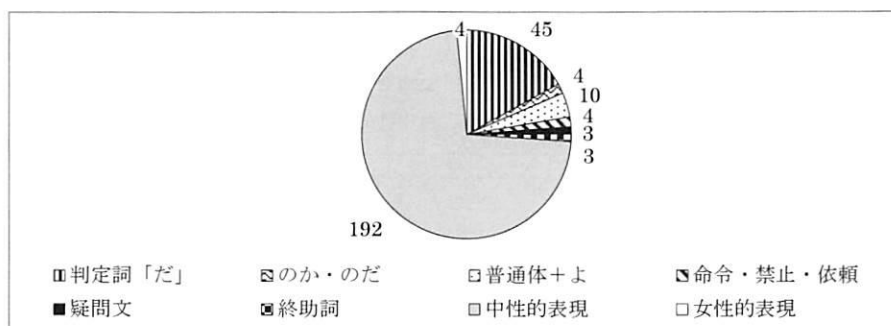


図3：『死の秘宝』でハリーが使用した文末表現



### 3.1.2. ハーマイオニー・グレンジャー

次にハーマイオニーについてである。三作共通で言えることは、ハリー同様、中性的表現が最も多く、『賢者の石』(図4)では51%、『アズカバンの囚人』(図5)では50%、『死の秘宝』(図6)では54%という結果となった。次に使用頻度の高かったのは、ハリーの男ことば同様、判定詞「だ」である。『賢者の石』(図4)では26%、『アズカバンの囚人』(図5)では21%、『死の秘宝』(図6)では22%という結果になった。ハーマイオニーの女ことばの使用頻度の高いものを三つ順に並べると、『賢者の石』(図4)では判定詞「だ」、疑問文の「のか・のだ」と終助詞が同率、『アズカバンの囚人』(図5)では、判定詞「だ」、終助詞、平叙文+α、『死の秘宝』(図6)では、判定詞「だ」、終助詞、平叙文+αの順となった。また、ハリーでは三作全てに女ことばの使用が見られたが、ハーマイオニーの男ことばの使用は一度もなかった。

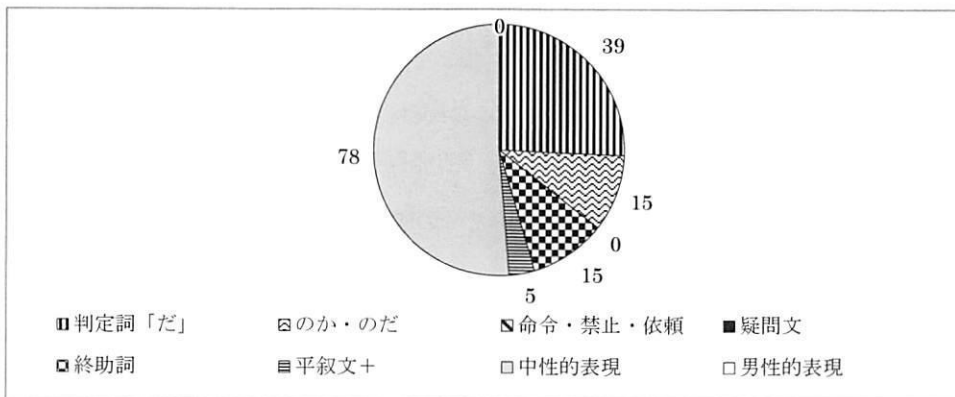


図4:『賢者の石』でハーマイオニーが使用した文末表現

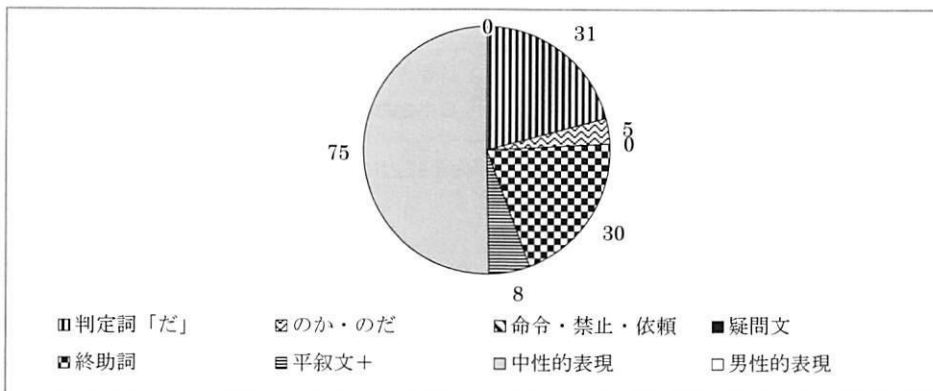


図5:『アズカバンの囚人』でハーマイオニーが使用した文末表現

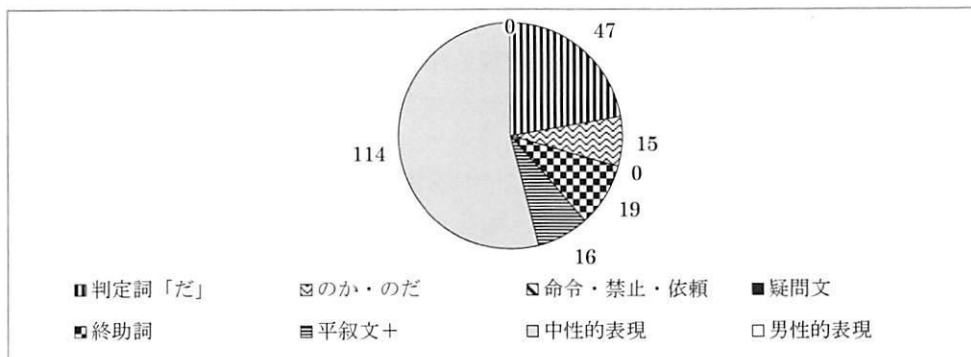


図6：『死の秘宝』でハーマイオニーが使用した文末表現

### 3.2. 文頭表現

次に文頭表現について比較していく。文頭表現は感動詞のみの比較である。感動詞の男ことばは益岡・田窪(1992)と金水(2003)では、男ことばは「おい」「こら」、女ことばは「あら」「まあ」の以上の4つだった。ハリー・ポッターの三作については、ハリーは「こら」の感動詞を使用することはなかった。「おい」については『アズカバンの囚人』で1回だけ使用した。ハーマイオニーは『賢者の石』では「あら」で2回使用し、他の話では使用しないという結果だった。

益岡・田窪(1992)と金水(2003)での記載はなかったが、黒須(2008)では同意に使用する「ああ」も非常に男性的な表現として述べられているため調査すると、ハリーは『賢者の石』と『死の秘宝』でそれぞれ3回使用していたことがわかった。

### 3.3. 代名詞

代名詞について比較していく。益岡・田窪(1992)と金水(2003)によれば、代名詞の男ことばは「僕」「君」「俺」「おいら」「わし」「お前」、女ことばは「あたし」が挙げられている。『ハリー・ポッター』シリーズで性差の出る代名詞は、ハリーの「僕」と「君」だけだった。ハーマイオニーは自分のことを「私」、相手のことを「あなた」と使用し、「あたし」の使用は見られなかった。

男ことばの「僕」「君」を話ごとに比較すると表1のような結果となった。表1から全体的に代名詞の使用頻度が低いことが分かる。「君」はハリーが成長するにつれて使用頻度は増加し、「僕」は『アズカバンの囚人』の時に最も使用頻度が下がるが、『死の秘宝』では最も割合が高くなる。また、3作全て「僕」よりも「君」の使用割合の方が少ない理由は、映画内で相手と呼ぶ際に「君」ではなく相手の名前を呼ぶことが多かったからだと推測される。

以上から、ハリーは年齢を重ねるにつれて男ことばの使用割合が低下しているとは言い切ることができなかった。

表1：代名詞の割合

	賢者の石	アズカバンの囚人	死の秘宝	計
君	4 (2.2%)	3 (2.2%)	16 (6.0%)	23 (4%)
僕	13 (7.5%)	8 (5.8%)	31 (11.7%)	52 (9.0%)
計	17 (9.8%)	11 (8.1%)	47 (17.7%)	75 (13.0%)

### 3.4. 性差的表現での比較

次に、男ことば・女ことばの性差が認められる表現それぞれの項目を映画ごとに比較していく。男ことばを使用している場合は「ハリー男」、ハリーが女ことばを使用している場合は「ハリー女」としている。ハーマイオニーの場合も同様に、ハーマイオニーが男ことばを使用している場合は「ハーマイオニー男」、ハーマイオニーが女ことばを使用している場合は「ハーマイオニー女」とする。

#### 3.4.1. 判定詞「だ」

判定詞「だ」については、図7から「ハリー男」「ハリー女」「ハーマイオニー女」で経年変化とともに使用頻度が低下していることが分かる。「ハーマイオニー男」での使用は見られなかった。

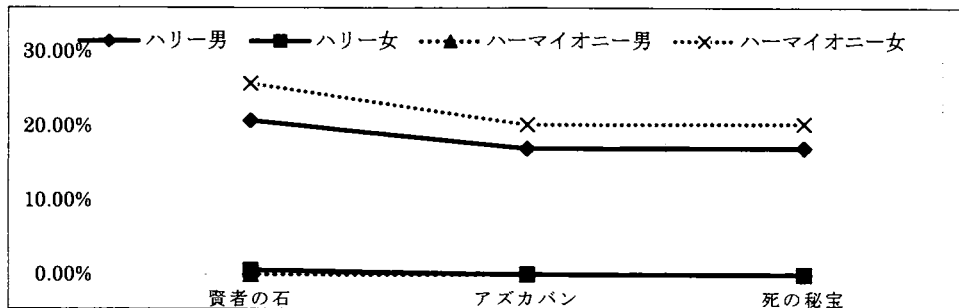


図7: 判定詞「だ」

#### 3.4.2. のか・のだの疑問文

のか・のだの疑問文については図8のようになった。「ハリー男」は最後の『死の秘宝』のみ使用となり、また増加するグラフとなった。「ハリー女」については、『アズカバンの囚人』での使用頻度が最も多いが、『死の秘宝』での使用頻度の割合が最も低いため、全体を見た時に使用傾向は下がっている。「ハーマイオニー男」での使用は見られなかった。「ハーマイオニー女」は経年変化とともに使用頻度が減少していることが分かる。

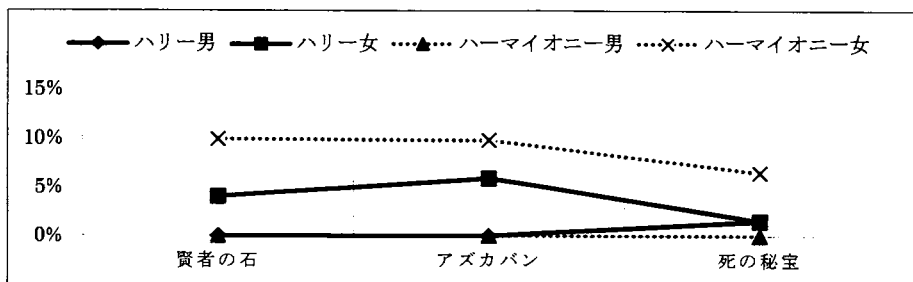


図8: のか・のだの疑問文

#### 3.4.3. 「普通体+よ」

「普通体+よ」については、図9のようなグラフとなった。「ハリー男」のみの使用があり、その他の使用は一度もなかった。「ハリー男」は経年変化により使用頻度が下がってきていることが分かる。

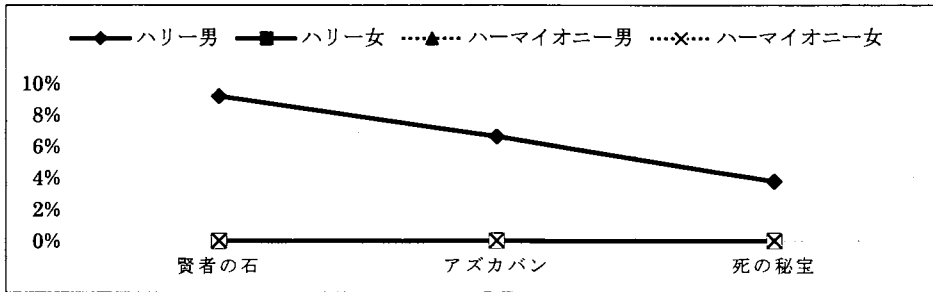


図 9:普通体+よ

### 3.4.4. 命令形・禁止形・依頼表現

「命令形・禁止形・依頼表現」について図 10 のようになった。図 10 も「ハリー男」のみの使用となり、その他の使用は一度も見られなかった。『賢者の石』で最も多く使用されており、『アズカバンの囚人』では最も使用頻度が低い。だが、『アズカバンの囚人』と『死の秘宝』はほぼ数値としては類似しているため、経年変化により使用頻度は減少していると言える。

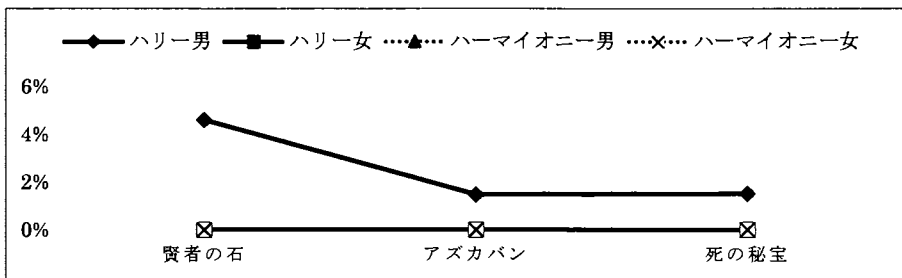


図 10 : 命令形・禁止形・依頼表現

### 3.4.5. 疑問文

「疑問文」については図 11 の通り、「ハリー男」についてのみ変化があり、その他の使用は一度も見られなかった。『アズカバンの囚人』での使用された割合が最も低く、『賢者の石』と『死の秘宝』ではほぼ同じ数値となった。そのため、経年変化による使用頻度の増減については、ほぼ変わらない形となった。

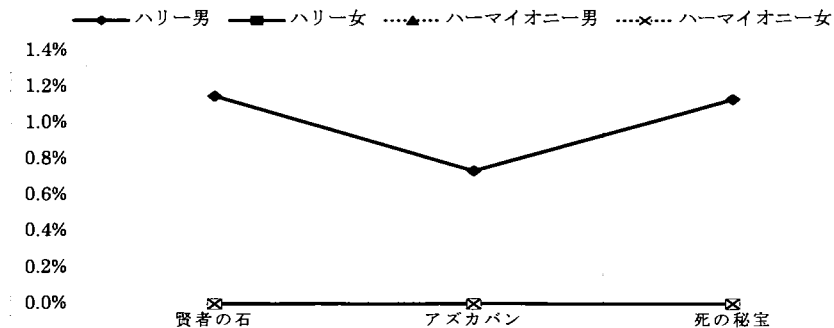


図 11 : 疑問文

### 3.4.6. 終助詞

「終助詞」は図 12 のようになり、「ハリー男」と「ハーマイオニー女」での使用が見られ、「ハリー女」と「ハーマイオニー男」での使用は見られなかった。「ハリー男」と「ハーマイオニー女」は同様のことが言えるが、どちらも『アズカバンの囚人』での使用頻度が最も大きい。最も低いのはどちらも『死の秘宝』であることから、使用頻度はだんだん下がっていると言える。

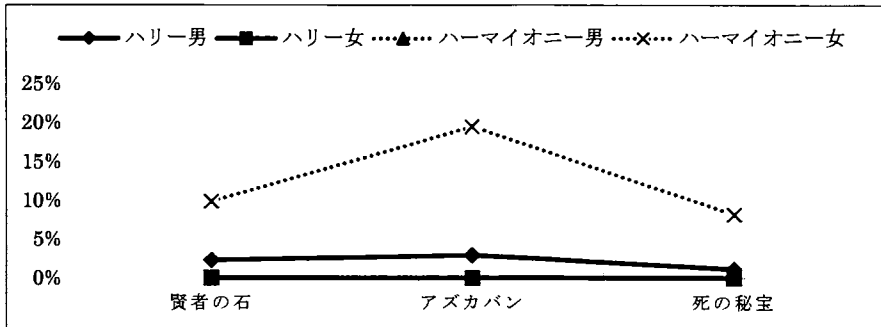


図 12 : 終助詞

### 3.4.7. 平叙文+α

「平叙文+α」は図 13 のようになった。「ハーマイオニー女」のみの使用が見られ、その他の使用はなかった。「ハーマイオニー女」は経年変化により使用頻度が増加していることが分かる。平叙文の後に加えられる文末表現の種類は「の・かしら・ですもの」があるが、最も多く見られた形は「平叙文+の」だった。

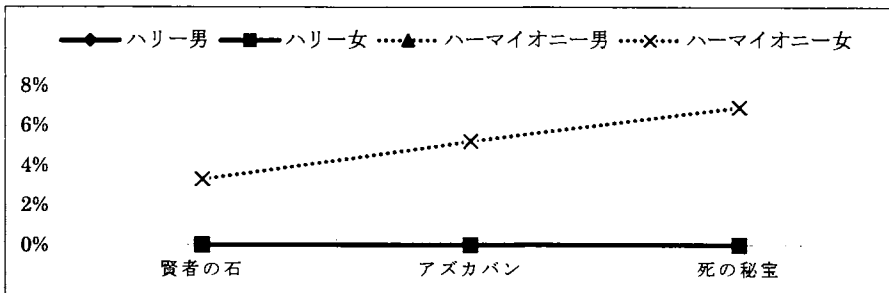


図 13 : 平叙文+α

## 4. 考察

今回の調査からわかったことは、ハリーとハーマイオニーのどちらも中性的表現が圧倒的に多いことである。調査対象だった映画では、ハリーとハーマイオニーは台詞の半数以上が中性的表現だった。次に男ことば・女ことばの中では、どちらも判定詞「だ」、終助詞の順に使用頻度が高いことがわかった。終助詞の次に多い形は、ハリーでは「普通体+よ」、ハーマイオニーでは映画ごとにそれぞれ異なる結果となった。

また、性差が認められる表現ごとに、経年変化による使用頻度の変化を調査した。最終的に使用頻度が低下するものが最も多かったが、「平叙文+α」の形は回を追うごとに上昇するグラフになり、終助詞は途中の『アズカバンの囚人』のみ上昇して最終的には低下した。仮説通りになら

なかったものを、一時的に上昇する形、一時的に低下し最終的に上昇で終わる形、常に上昇していく形で分類すると以下のように振り分けられる。

<ハリー>

- ・一時的に上昇...のか・のだの疑問文(男)(女)
- ・一時的に低下...疑問文(男)

<ハーマイオニー>

- ・一時的に上昇...終助詞(女)
- ・常に上昇...平叙文+α(女)

まずハリーから考える。一時的に上昇するグラフになったのは、のか・のだの疑問文(男)(女)である。のか・のだの疑問文(男)は、最終話の『死の秘宝』のみで使用が見られた。『死の秘宝』では4回の使用が見られ、これらは全て切羽詰まった状態でハリーの感情が高まっている時に使用している。そのため、最終話で悪の勢力が最も強まって危機感が高まっているから思わず乱暴な言い方がでてしまったのではないかと考えた。

のか・のだの疑問文(女)は『アズカバンの囚人』で最も使用頻度が高くなって『死の秘宝』では最も数値が低くなっている。のか・のだの疑問文(女)だが、「僕どうなったの?」といった文末表現を金水(2003)は女性的ではなく中性的であると述べている。つまり、益岡・田窪(1992)では女ことばに分類されるのか・のだの疑問文を、吹き替え翻訳者である岸田は金水(2003)のように女ことばではなく中性的な表現として判断して使用したのではないだろうか。そのように考えるとハリーは男らしい性格であるのに女ことばであるのか・のだの疑問文(女)を使用しているもおかしくない。

一時的に低下するグラフは、疑問文(男)のみであった。疑問文(男)のグラフは『アズカバンの囚人』の数値が最も低く、『賢者の石』『死の秘宝』は同じ数値である谷型のグラフになっている。『賢者の石』では2回、『アズカバンの囚人』では1回、『死の秘宝』では3回性差のある疑問文を使用していた。割合でグラフを作ると谷型になったが、実際使用回数を見ると全体的にどの話でもほとんど使用していないことがわかる。そのため、僅差な数値であるからこれらは直線に変わりなく使用頻度もほぼ変わらないと判断する。

次にハーマイオニーである。ハーマイオニーの一時上昇したグラフは終助詞(女)で、『アズカバンの囚人』のみ数値が高い山型である。終助詞(女)が山型のグラフになった理由は、ストーリーの違いに関係してくるのではないかと考える。他の2作と違って『アズカバンの囚人』ではハーマイオニーが中心となって話を展開していくため、『アズカバンの囚人』のみハーマイオニーの台詞はハリーより多かった。また終助詞の女ことばは「わ」のみであるが、益岡・田窪(1992)では、『わ』は、自分の感情や、ある事柄に対する自分の印象を独り言のようにして相手に伝える表現(p. 224)としており、ハーマイオニーが中心となって相手に伝える場面が多かった『アズカバンの囚人』と山型のグラフが関係しているのではないかと考えられる。

最後に常に上昇するグラフだった平叙文+α(女)である。平叙文+αの種類には「の・かしら・ですもの」があるが、最も使用の多い「の」の回数はそれぞれ『賢者の石』で2回、『アズカバンの囚人』で7回、『死の秘宝』で15回であった。つまり、「平叙文+の」の増加が大きく関係していることが分かる。「平叙文+の」の使用が増えた理由として考えられることは、「平叙文+

の」は女性的な表現ではあるが他の「かしら・ですもの」と比較すると女性らしさが弱く中性的な表現に近いことから、使用しやすいのではないだろうか。そのため、「の」の使用が増加している一方で「かしら・ですもの」の使用頻度が低下していることが関係していると考えられる。

以上から、『ハリー・ポッター』の幼少期から成人になるまでの経年変化において男ことば・女ことばの使用頻度は全体的に若干の減少傾向が見られ、一方で中性的な表現は増加傾向にある、ということである。このことから、筆者の仮説は検証されたと言える。映画を見て、幼少期のハリー・ハーマイオニーは無邪気な振る舞いが多くストレートな表現をよくしているように感じる。例えば、『賢者の石』でハーマイオニーが自分を悪く言うロンと出くわし、傷ついて泣いてしまうシーンがある。その時のロンの台詞は「嫌味な奴。だから友達がいらないんだよ」できつい言葉を言っている。またハリーがロンの誤魔化すような言葉をはっきりと否定する台詞もある。それに比べ、ハリーやハーマイオニーが大人になった『死の秘宝』では、ストレートな表現というよりか自分の気持ちを抑えたような表現が何度か見られた。例えば、ロンとハリーが喧嘩するとき、ハリーはロンが嫌な気持ちにならないように最初は冗談っぽく「どうしちゃった？」とロンと喧嘩しないような表現を使っていることがわかる。そういった部分から、ハリーは断定的な表現をしなくなることで、男ことばの使用頻度が減少しているのではないかと考えられる。

ハーマイオニーについては、『賢者の石』では自分の知識をひけらかすようなシーンが何度もあることから自信が溢れているような印象があり、そのようなシーンでの女ことばの使用頻度は高い。しかし、大人になるとそのようなシーンが無くなったわけではないが減少している。ハーマイオニーの自己主張するシーンの減少が女ことばの使用頻度の減少に関係してきていることが言えるのではないかと考える。つまり、登場人物は成人に近づくとともに他人を慮るようになることで性差が現れるような表現を使用しなくなると考えることができるのである。

ハリーとハーマイオニーの台詞を調査する中で、益岡・田窪(1992)や金水(2003)に記載されていないが、男ことば・女ことばに含まれるのではないだろうかと考えるものが2つあった。一つ目は「だろう」の男ことばとしての使用である。ハリーは「見えただろう？」や「同時に二か所にいられるわけないだろう？」といった同意を求める疑問形で何度か使用していた。二つ目に「じゃない」の女ことばとしての使用である。「いいじゃない」や「そっちこそ臭い靴磨きブラシみたいじゃない」といった肯定的な表現がハーマイオニーの台詞で何度か使用がみられた。これら二つとも小川(2006)では男性らしさ・女性らしさとして特徴があるものとして記載されていた。小川(2006)の調査で、辞書で男性語・女性語として記載されている表現には記載されていない表現でも実際に普段使っている人に使用感覚がある表現が存在していることから、男ことば・女ことばは時代の変化とともに男ことば・女ことばと認識する表現が変化していることが分かった。

## 5. おわりに

本研究では、子供が成長したときに表現方法にも変化が現れるのかどうかについての調査を行った。今回は『ハリー・ポッター』シリーズの吹き替え版を用いて、ハリー・ポッターとハーマイオニー・グレンジャーの台詞から、登場人物の成長で性差的な表現の使用頻度はどのように変化するのか調査した。その結果、若干ではあるが性差的な表現の使用が減少していることがわかった。この結果をもとに、邦画でも同様のことが言えるのか検証していきたいと考えている。また、ドラマや映画ではなく、実際の人間の会話でも同様のことが言えるかを検証する必要がある。そのためには、ある地域の小学校・中学校・高等学校といった年齢別の人にインタビューし、そこ

から現代の言葉づかいの性差について検証していきたい。最終的に、それらの調査結果をもとに最新の男ことば・女ことばの分類表を作成していきたいと考えている。

今回の調査での課題は、果たして現実の日常生活で使用される話しことばについても同様のことが言えるかどうかである。今回の調査は映画の吹き替えを使用したことから吹き替え映画に限られた話ではないだろうか。水本(2005,p. 88)は次のように指摘している。

- (1)現代の30代以前の若い女性は、従来の女性文末詞を使用しない。(2)にもかかわらず、テレビドラマの中では、今なお若い女性たちに従来の女性文末詞を使用させる傾向が強い。
- (3)女性文末詞使用は、脚本家の年代にかかわらず比較的若い年代の脚本家にも認められる。
- (4)比較的、女性脚本家のほうが「不使用」を意識し始めている。

そのため、ハーマイオニーの台詞の女性的表現が現代の日常会話でも使用されるか、ということになると疑問がある。また、ハリーの男ことばに対しても同様に今後の課題とする。また、今回の比較対象が10歳から18歳という短いスパンであったことから、長期間での経年変化による比較も考えていきたい。最後に、今回の『ハリー・ポッター』シリーズの吹き替え翻訳者は全て岸田恵子によるものだった。岸田恵子による吹き替え翻訳はこのような結果であったが、他の吹き替え翻訳者は異なる結果を出す可能性があるため、他の吹き替え翻訳者が取り扱う映画にも同様のことが言えるか検証していく必要がある。

#### 一次資料

括弧内の年は、日本公開年である。

クリス・コロンバス(監督・製作総指揮)、デヴィッド・ハイマン(製作)、マーク・ラドクリフ、マイケル・バーナサン(製作総指揮)、スティーブ・クローヴス(脚本)、岸田恵子(吹き替え翻訳)、(2001)「ハリー・ポッターと賢者の石」アメリカ・イギリス、Warner Bros.(製作・配給)、2001年製作のDVDを使用  
アルフォンソ・キュアロン(監督)・デヴィッド・ハイマン、クリス・コロンバス、マーク・ラドクリフ(製作)、マイケル・バーナサン(製作総指揮)、スティーブ・クローヴス(脚本)、岸田恵子(吹き替え翻訳)、(2004)「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」アメリカ・イギリス、Warner Bros.(製作・配給)、2004年製作のDVDを使用

デヴィッド・イエーツ(監督)、デヴィッド・ハイマン、デヴィッド・バロン、J・K・ローリング(製作)、ライオネル・ウィングラム(製作総指揮)、スティーブ・クローヴス(脚本)、岸田恵子(吹き替え翻訳)、(2010)「ハリー・ポッターと死の秘宝 Part 1」アメリカ・イギリス、Warner Bros.(製作・配給)、2010年製作のDVDを使用

デヴィッド・イエーツ(監督)、デヴィッド・ハイマン、デヴィッド・バロン、J・K・ローリング(製作)、ライオネル・ウィングラム(製作総指揮)、スティーブ・クローヴス(脚本)、岸田恵子(吹き替え翻訳)、(2011)「ハリー・ポッターと死の秘宝 Part 2」アメリカ・イギリス、Warner Bros.(製作・配給)、2011年製作のDVDを使用

#### 参考文献

小川早百合(2006):「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識—日本語教育での活用に向けて—」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』pp. 39-51 ひつじ書房。



- 尾崎喜光(1997):「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』pp. 33-58 ひつじ書房.
- 尾崎善光(2011):「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『合本 女性のことば・男性のことば(職場編)』 pp. 33-58 ひつじ書房.
- 北原保雄(2011):『明鏡国語辞典第二版 大型版』大修館書店.
- 金水敏(2003):『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 黒須理紗子(2008):「女ことば・男ことばの研究—差異と変遷—」『日本文学』104, pp.187-203.
- 新村出(2008):『広辞苑 第六版』岩波書店.
- 益岡隆志・田窪行則(1992):『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 増田祥子(2016):「女性文末形式の使用の現在—『女性のことば・職場編』調査と比較して—」現代日本語研究会『談話資料 日常生活のことば』pp. 131-154 ひつじ書房.
- 水本光美(2005):「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター—文末詞(終助詞)使用実調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』pp. 73-94 ひつじ書房.